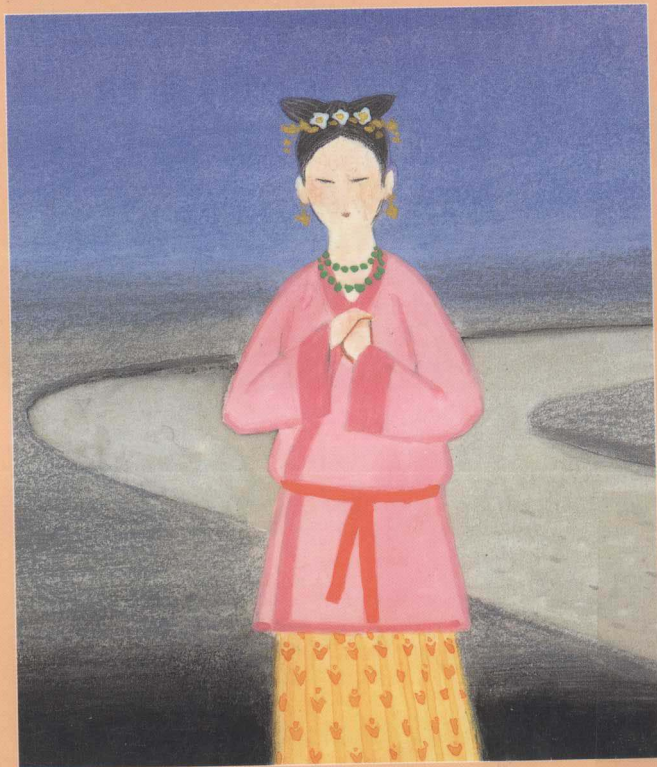


聖徳太子 3

◆日と影の王子

黒岩重吾

文春文庫





文春文庫

聖徳太子 日と影の王子 3

定価はカバーに
表示してあります

1990年 5月10日 第1刷

著 者 黒岩重吾

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-718225-4

文藝文庫
 江苏工业学院图书馆
 聖徳太子
 日影の王
 藏書章

黒岩重吾



文藝春秋

目次

戦雲

9

大王の死

74

皇太子への道

176

新しい権威

279

（主要登場人物）

厩戸皇子（聖德太子）うまやどのみこ 橘 豐日大王（三十一代用明天皇）と穴穗部間人皇女との間に生まれた聡明な皇子。

推古天皇の皇太子となる

蘇我馬子そがのうまこ 大臣。倭国一の实力者。蝦夷えみしの父

刀自とじ古郎女このいらつめ 蘇我馬子の娘。厩戸皇子と結婚する

秦河勝はたのかわかつ 山背の豪族。もと厩戸皇子の舍人とねりの長

迹見赤檮とみのいちい 倭国一の武人。秦河勝の後を継いで厩戸皇子の舍人の長となる

豐御食炊屋姫とよみけかしきやひめ 淳中倉太珠敷大王（三十代敏達天皇）の皇后。後の三十三代推古天皇

菟道貝鮪皇女うじのかいだこのひめみこ 豐御食炊屋姫の娘。厩戸皇子の正妃となるが、子供に恵まれない

苦岐岐美郎女ほききみのいらつめ 膳 臣加多夫古かしわてのおみかたぶこの末娘。厩戸皇子の第三夫人となる

泊瀬部皇子はつせべのみこ 穴穗部間人皇女の弟（厩戸皇子の叔父）。即位して泊瀬部大王（三十二代崇峻天皇）となるが、

馬子の手の者に殺される

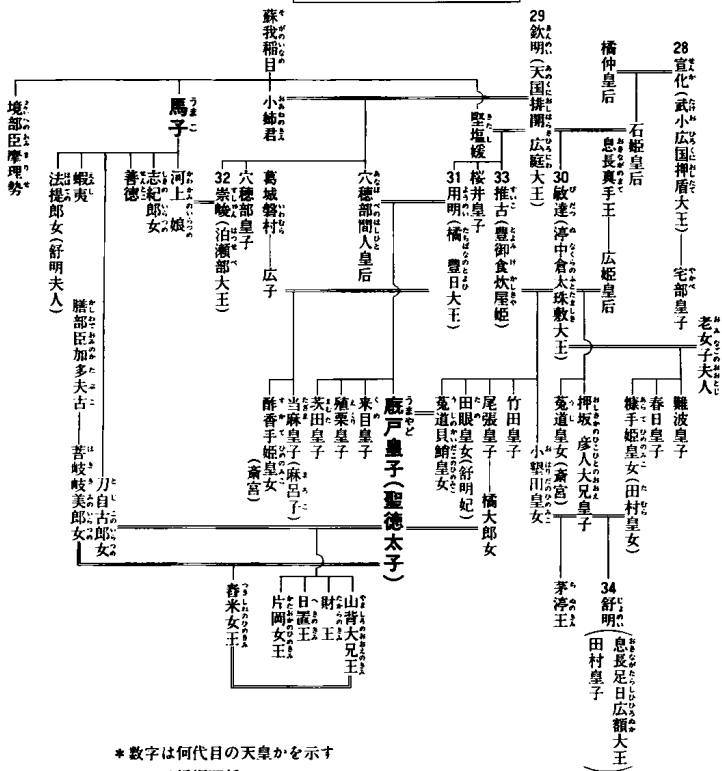
東 漢 直駒 蘇我馬子の警護隊長

竹田皇子たけだのみこ 豐御食炊屋姫の病弱の皇子。菟道貝鮪皇女の兄

山背王やましろのみみ 厩戸皇子と刀自古郎女とよみけかしきやひめの間に生まれた皇子

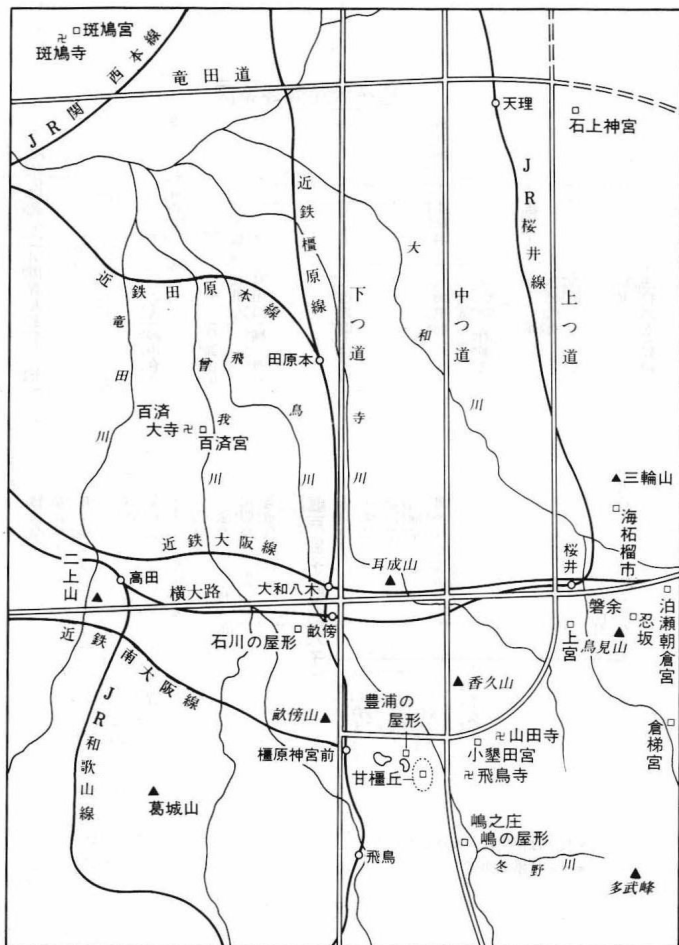
慧慈えじ 高句麗僧。来倭して厩戸皇子の師となる

聖徳太子関係系図



* 数字は何代目の天皇かを示す

*一は婚姻関係



聖徳太子——日と影の王子
三

戦 雲

迹見赤檮に強く鍛えられながら、舎人達が萎縮せずいきいきとしている理由を厩戸は間もなく知った。

赤檮は舎人達が非番の日、女人達と構合うことに対し、河勝ほどやかましく注意しなかったのだ。

ただ、どんな女人でも構わない、というわけではない。自分の本貫地である鳥見山麓周辺の女人に限られていた。

赤檮は、子供が生まれたなら、子供を産んだ女人の実家を援助するから、子供のことなど気にしないのでよい、と舎人達にいつたらしい。赤檮の財力は大変なものだ。

赤檮にとってそれぐらいのことは何でもないことなのだろう。若い舎人達が、赤檮に鍛えられながら、いきいきとしているのは女人のおかげだった。

自分の本貫地が上宮の傍で、領地内の女人だから、赤檮は舎人達に対して、思い切った自由

を与えることが出来たのだらう。

河勝時代と異なり、舎人達は、河勝の眼を盗み、村の童女に手を出したりしなくて済むようになった。

ただ舎人達と女人の関係はすべて赤檮に知られていた。赤檮は、舎人達に、自分の村の女人と構合った際、必ず報告するように、と命じたのである。

村の女人が舎人と関係を持ち、身籠った際、相手が誰か分らないようでは、ふしだらな関係といわざるを得ない。

それでは、厩戸皇子を守る舎人の資格がない、と赤檮は考えていたようだ。

舎人達は、赤檮との約束を守った。

厩戸は三人めの伽の女人と会った夜、上宮への帰途、赤檮から舎人達の女人関係を知らされたのである。

「皇子、やつがれは舎人達に厳重に申しております、女人に溺れて武術の訓練を怠るような者は、やつがれが皇子に報告し、舎人の任を解いていただくと……つまり武術の訓練を怠る者は、皇子の警護をも怠る者だ、というのがやつがれの考えなのでございます、幸い、やつがれの氣持が通じたらしく、今のところ訓練を怠るような者はおられません」

厩戸は赤檮に鍛えられているにもかかわらず舎人達がいきいきしていることへの疑念が解けた。さらに新しい赤檮の一面を見たような思いだった。河勝は舎人達に慕われていたが、赤檮も違った意味で、慕われていそうだ。

赤檮は厩戸にも伽の女人を与えたのである。それが噂うわさになれば、赤檮は馬子うまこから注意を受けるかもしれない。

だが厩戸しやべが喋らない以上、噂にはならないだろう。舎人達もうすうす気付いているが、見て見ないふりをしていた。

ただ、赤檮が舎人達に、女人との関係を条件つきで自由にしたのは、猛将であり、武芸の達人でもある赤檮の自信だった。

厩戸も赤檮に対してはなんとなく身勝手なことがいえなかった。気に入った伽の女人と、もう一度会いたい、といえないのだ。

もしこれが河勝だったら、身勝手なことをいいそうだ。

その辺りに河勝と赤檮との違いがあった。当然、赤檮と話をしていると、河勝の時よりも気軽に気持で喋れない。

だが、赤檮の価値はそういうところにあるのかもしれない。

河勝も赤檮も舎人の長おきとしてはやり方が少し違うが、共に立派な人物である。そういう面で厩戸は幸運だった。

もうそろそろ刀自とじこいづつ古郎女が子供を産む、という六月中旬、河勝が従者を連れて上宮かみつみやにやって来た。前もって河勝から使者があったので、厩戸は待ちに待っていたのだ。

河勝が来訪した目的は、刀自古郎女が産んだ子供を自分の家に引き取ることを正式に頼みに来たのだ。

その件で厩戸はここ一月ほど刀自古郎女と揉めていた。刀自古郎女は屋形に仕える女人の長、虫飼子の実家の葛城で育てたい、と望んでいた。

山背は遠過ぎる、というのであった。虫飼子は厩戸に親愛感を抱いている葛城臣烏那羅の縁戚の娘だった。

蘇我氏と葛城氏は親しい。それに馬子の父、稲目時代の蘇我氏の本貫地は葛城である。刀自古郎女は馬子にも自分の希望が通るように訴えていた。

だが厩戸は河勝の実家で育てたかった。それに、河勝と約束をしている。

厩戸は断乎として河勝の実家で育てる、と主張した。馬子に対しても、自分の意を述べた。

馬子は、河勝の実家よりも葛城氏の方を内心望んでいたかもしれない。だがこういうことは大体、夫婦が決めることである。

それに厩戸は、この件に関しては一步も譲らない、という決意を示している。

厩戸が馬子に、これほど自分の意を主張したのは初めてだった。

馬子は遂に、皇子の気のすむようにされたらよい、と厩戸に同調したのだ。

河勝を迎え、迹見赤檮を始め舎人達と夕餉を兼ねた宴をもよおした後、河勝は刀自古郎女が産む子供の件で厩戸と上宮の堂で話し合った。

河勝はもう舎人ではない。山背の大豪族、秦造河勝である。客間に上げようとしたが辞退したので庭の堂で会ったのだ。

舎人時代よりも河勝は太っていた。

厩戸に仕えていた時はやはり、一刻たりとも、心からのんびりした時はなかったに違いない。河勝は、難波吉士達からの情報で、刀自古郎女が産む子供の乳母を誰にするかで、厩戸が、馬子や刀自古郎女と揉めていることを知っていた。

河勝は、刀自古郎女や馬子が反対なら無理に自分の家で育てなくてもよい、と告げた。

あまり強引に自分の意を通さない方がよい、というのである。

河勝は、こういうことで厩戸と馬子の間に亀裂が生じるのを恐れていた。

厩戸は、こういうことこそ、自分の意を通さなければならぬのだ、と河勝に心境を説明した。

「これは大事なことなのだ、吾が刀自古郎女が出産するまで、菟道貝鰯皇女と婚姻しないことにしたのは、何も大臣を恐れたからではない、やはり無事に吾の子を産んで貰いたいからだ、大臣も刀自古郎女も、吾の本心を知らず、強く出れば吾が引つ込む、と少し吾を甘く見過ぎている、だから子供のことだけは退けない、と決意し、大臣に自分の意が変らないことを告げた、大臣も了承した、心配しなくてもよい、ただ、刀自古郎女はあの気性だから、最後まで、山背は遠過ぎる、といい続けるだろう、これはまだ刀自古郎女に告げてはいないが、こう、妥協したらどうだろうか、子供が生まれてから二、三年、石川か飛鳥で育てるが、乳母は河勝が超越して欲しい、三、四歳になってからそちの実家で養育する、それでどうだ？」

河勝は瞑目した。

厩戸が馬子と渡り合い、自分の意を通したのを知り、厩戸が一廻りも二廻りも大きくなった、

と感動したのかもしれない。

「皇子、その方がよろしゅうございます、名案だ、と思います」

「そうか、ではそうしよう、吾はな、生まれた子供は、仏教信者の家で育てたいのだ、これは大臣も同じだと思ふ、吾は刀自とじ古郎女このいらつめとは、よくいい合ふが、嫌ではないのだ、女人にしては聡明だし、いい合つてもいつまでも根に持たない、そこが好きだ、だからまだまだ子供が生まれるだろう、兎に角、乳母の手配を至急頼む」

「皇子、屋形もやつがれに建てさせて下さい」

「そうだな、とすると河勝、大臣に会つておいた方がよい、大臣はあれで計算高い、河勝が、自分の孫のために屋形を建てるといえば、悪い気はしないだろう、吾は明日、嶋の屋形に顔を出すから、そちが挨拶したい、と申しておる旨、大臣に話しておこう、ただ、刀自古郎女にはまだ会わない方がよい、吾が説得し、刀自古郎女が納得した後で、会つた方がよいだろう」

「皇子に、そこまで御配慮いただき、感激でございます」

河勝の眼が赭あかくなつていた。

「なあに、たいしたことではない、どうだ、二人で酒でも飲もうではないか」

といつて厩戸は女人を呼んだ。酒を酌み交しながら、二人は思い出話に花を咲かせたが、厩戸は、伽あやの女人については口を塞いだ。厩戸は、たくましく思慮深い皇子に成長していた。

翌日の夕方、河勝は厩戸と共に石川の屋形で馬子に会つた。

厩戸が、生まれる子供のために河勝が、屋形を建てたい、と希望していると告げると、厩戸

の予想通り馬子は機嫌がよかった。

建てるなら石川に建て、二年ほどしてから山背で育てたらよい、と馬子はいった。

河勝の実家は迹見赤檣以上の資産家である。馬子としては飛鳥寺の建立に総力をあげているので、河勝の申し出は大歓迎だったのだ。

馬子が河勝に、刀自古郎女に会って戻ればよい、と話したので、厩戸は河勝を刀自古郎女の屋形に案内した。

刀自古郎女は寢具に横になったまま、河勝と会った。ただ、直接顔は合わせず絹布越しに河勝の挨拶を受けた。

「河勝殿、生まれた御子を、すぐ山背に連れて行くことは、私が絶対許しませぬ」

肩で息をしながら刀自古郎女は、河勝に対し、自分の決意が変わらないことを告げた。

河勝は、その件については、皇子と大臣におまかせしているが、刀自古郎女様の意向も充分尊重するつもりです、と答えた。

「やつがれは、今はただ無事に立派な御子が生まれることをみ仏に祈っています」

河勝の誠意の籠った言葉に刀自古郎女は少し安心したようだった。

「そなたの言葉、嬉しく聴きました、御子をどこで育てるかについては、私が産んだ後で、相談し、決めます、お見舞、御苦労でした」

相変らず肩で息をしているが、刀自古郎女の口調は毅然としていた。誇りが高く勝気な女人である。